

人々の命を救うための 研究施設を作りたい

「このウイルスが、下痢症の主な原因ではないか」

「いや、でも地域によっては種類が違う」「では、今度はこつちを調べてみようか」顕微鏡を交互にのぞき込む、日本とケニアの研究者たち。周りには、実験用のピーカーやフラスコなどが整然と並べられている。ここはアフリカ随一の感染症の研究機関、ケニアの首都ナイロビにある「ケニア中央医学研究所（KEMRI）」。地球規模課題対応国際科学技術協力（S.A.T.R.E.P.S.）を通じて、2011年から長崎大学熱帯医学研究所と共に、東アフリカで猛威を震う黄熱病、リフトバレー熱の研究に取り組んでいる。

KEMRIと長崎大学の共同研究。その関係をひもとくには、約半世紀前にさかのぼらなければならない。ケニアでは独立後の1960年代、アフリカの中でも早くから保健医療サービスの改善に力を入れていた。そして国際社会の先陣を切って、それを支えたのがJICA。日本で唯一、熱帯医学の研究所を持つ長崎大学の協力を得て、66年から西部のリフトバレー州立病院に対する協力を開始した。現地の医師、看護師と共に、来る日も来る日も、マラリアや結核の患者を診察する日々。そのうち、患者を診るだけでなく、病の根源を突き止める、適切な診断法・治療法を生み出す、研究も強化すべきだという声がかかるようになった。

当時のケニアには、国内に、研究施設

てきた。その秘訣を学びたい。開所式でケニア大統領が述べた言葉は、日本への厚い信頼を表していた。

住民と共に取り組む 現場に根差した研究

KEMRIへの支援を支えたのは、ケニアの医療事情を熟知する長崎大学に代表される日本国内の研究開発機関だった。停電が頻発、必要な機材や薬品を入手するのも困難な中、両国の研究者たちはどんな苦労もいとわなかった。

現在、長崎大学国際健康開発研究科長を務める青木克己教授は、80年代初頭からKEMRIの協力を携わってきた研究者の一人。その成長の道のりを現地の人々と共に歩んできた。「感染症の研究は日本ではマイナーでしたが、世界中から病気を失くすことが我々の使命。熱帯医学の研究を推進



1980年代初頭、細菌・ウイルス分野の研究に励んだ日本とケニアの研究者



寄生虫学の分野の研究チームは、感染症の流行地域といわれる農村部に通っては、川を浮遊する寄生虫を調査した



日本の無償資金協力で建設されたケニア中央医学研究所。アフリカの熱帯医学の拠点として、世界各国の研究者と共同で最先端の研究を行っている



日本と築き上げた 熱帯医学の拠点

開発途上国を中心に世界を脅かしている感染症。一人でも多くの命を救うため、その適切な診断法・治療法の研究が急がれている。ケニアの首都ナイロビにある「ケニア中央医学研究所」には、ケニアと日本の熱帯医学の研究者たちの努力の軌跡があった。



住血吸虫症の検査のため住民の尿検査を実施

してきた長崎大学にとって、KEMRIに対する協力は大変意義あるものでした」と話す。青木教授の専門は寄生虫学。住血吸虫やフィラリアなど寄生虫が媒介する感染症の研究だ。農村部に足を運ぶには、寄生虫が生息する川の水や人々の尿を採取し、研究室に持ち帰って分析を行った。

同時に、青木教授らは村々での調査を通じて、感染症の原因である農村部の衛生環境に目を付けた。「村の人々には衛生管理という概念すらない。感染症も、なつて当たり前」という感覚すらありました。どんなに研究を重ねても、彼らの意識を変えなければ根本的な解決にはつながらないと考えたのです。そこで青木教授らが力を入れたのが「衛生教育」。最初のころはケニア側から「衛生教育など研究者のやることではない」という批判もあったが、青木教授らはその方針を貫いた。研究室内で終わらない、現場に根差した研究を重視していたからだ。

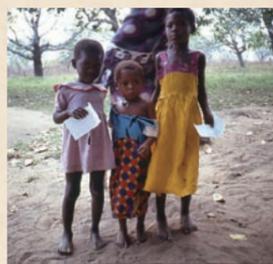
27年にも及んだKEMRIへの協力。JICAは現地のニーズに応じて研究の主軸を変え、HIV/エイズや肝炎の診断キットの開発、ケニア人研究者の日本での研修など、その協力の成果を形として残していった。そしてプロジェクトが終了を控えた、2005年、KEMRIと共に歩み続けてきた長崎大学も大きな一歩を踏み出した。今後もKEMRIとアフリカの感染症の撲滅に取り組むべく、長崎大学熱帯医学研究所はKEMRI内にアフリカ拠点を設置。現在はS.A.T.R.E.P.S.なども活用しながら、独自に共同研究を進めている。「これでアフリカに腰を据えて研究に取り組める体制ができた。JICAのプロジェクトへの参加を経て、長崎大学の夢がかなったのです」と青木教授。長年かけて築き上げられた信頼関係は、共同研究を進める上でかけがえのない財産となっている。

長年アフリカで地域に根差した保健サービスの開発に従事し、第1回野口英世アフリカ賞を受賞したミリアム・ウエレ博士は、「何もないところから医学研究所を作り上げるといって、ケニア政府の壮大な構想を支援してくれたのはJICAだけでした。そして現実に今、KEMRIはアフリカを代表する研究機関となったのです。70〜80年代にかけて、ケニアのKEMRI設立に向けた動きを見てきた証人として、「日本とケニアの」人が「生み出した成果」だと評価する。

日本とケニアが築き上げてきたアフリカの熱帯医学の拠点。KEMRIの研究は今、新たなステージを迎えている。



JICAの支援により、わき水を活用した採水場(左)よりパイプを引いて共同水道施設(右)を設置。ケニアの研究者とアイデアを出し合いながら、地域の人々の生活改善につながる研究に励んだ



チャームと呼ばれる「魔除け」を身につけた少女。伝統医の勧めによるものだが、このような疾病に対する間違った認識が疾病対策を困難にしていた

History

次世代への財産

※ガーナで黄熱病の研究に従事した野口英世博士の志を引き継ぎ、アフリカでの医学研究や医療活動を通じて、感染症などの疾病対策において功績を残した個人・団体に贈られる。2008年の「第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)」で設立された。